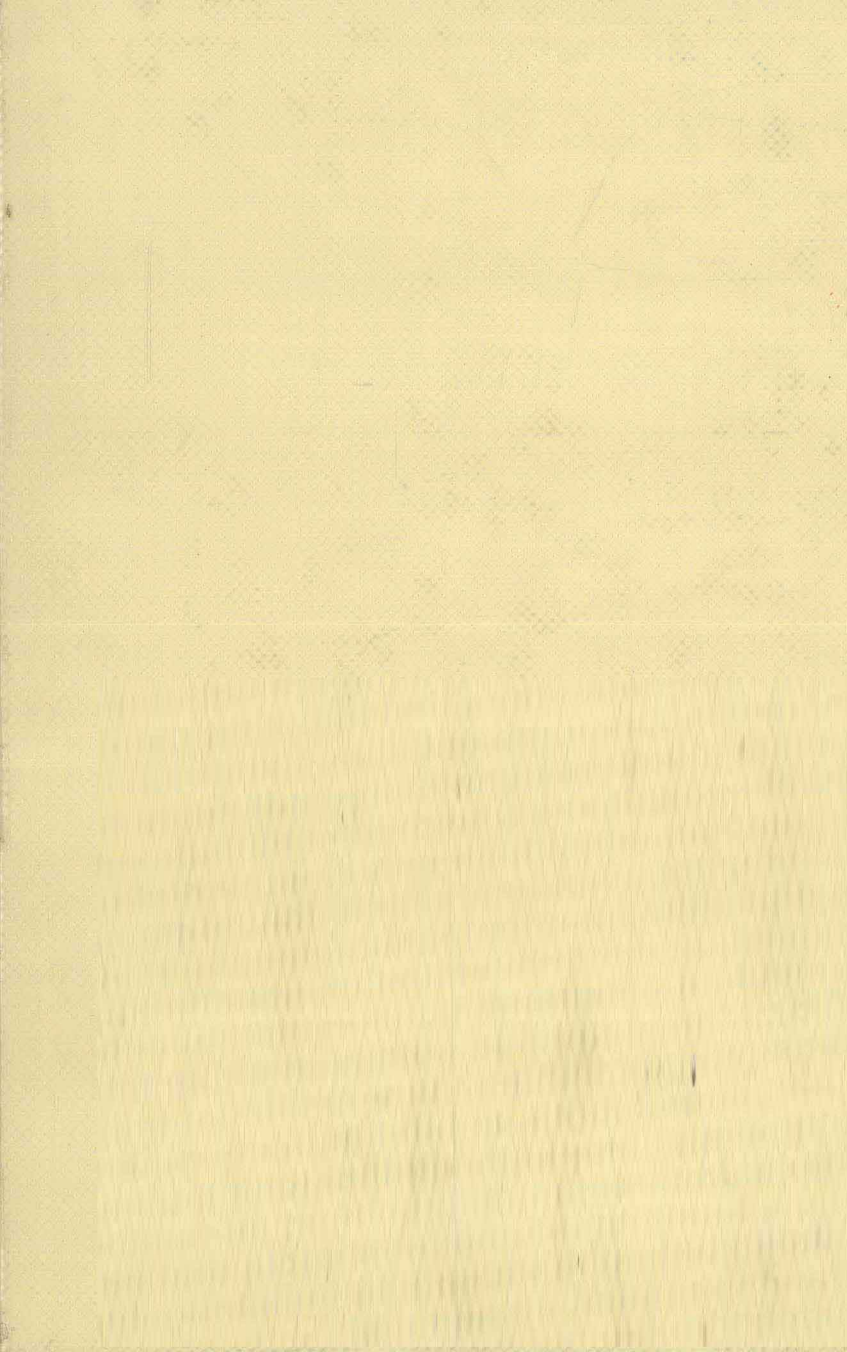




後

元

集

卷

二

卷

江苏工业学院图书馆
书章

鏡花全集 卷十二 第十二回配本（全二十九卷）

定價二千二百圓

昭和十七年四月三十日 第一刷發行
昭和四十九年十月二日 第二刷發行

著 者 泉 鏡 太 郎

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 株式會社 岩 波 書 店
東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號

印刷 三陽社 製本 松岳社

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

尼　　ケ　　紅　　（明治四十二年二月）…………… 一

紫　　手　　綱　　（明治四十二年四月）…………… 101

貸　家　一　覽　　（明治四十二年五月）…………… 165

海　の　使　者　　（明治四十二年七月）…………… 221

吉　　祥　　果　　（明治四十二年九月）…………… 233

神　　　　　　鑿　　（明治四十二年九月）…………… 237

白　　　　　　鷺　　（明治四十二年十月）…………… 369

歌 行 燈 (明治四十三年一月)..... 五九五

國 貞 る が く (明治四十三年一月)..... 六七九

尼
ヶ
紅

大尉江崎順吉氏は、堪り兼ねて、がつと行つたが、血臭く、其の變な、膠の腐れたやうなのが棒になつて咽喉許へ込上げるので我慢が成らぬ。——今は何をか包むべき、正に此れ蝮の咬で。

それでも彼は、件の長蟲を持參に及んで、庭前に於て鰻がかりの掴み料理と御目に懸けた、村の六兵衛が、來た時の勢とは、がらりと時の間に客子が變つて、ぐたりと成つて、大尉が居室の前から本堂へ續く廻り縁と、向うの卵塔場とを隔てた曲みなりの木戸を、……此の松輪寺の門内、崩掛けた鐘樓の方へ出て行くまでは、——辛うじて堪へて見送つたが。……

其の六兵衛の後姿が、日盛の百日紅の下へ入つて、黒くなつて、劃然りとしたのさへ、茫と影の如く目に映つたほど、彼は氣が重く、胸が切なく、——件の鐘樓の傍に、近ごろ照續く炎天に太陽の榮華を見よと、日射の腕に花の輪を投げたやうで、何時が代に散らうものか、夜も月の板戸越、桃色の蛇の目に成つて、緑の蚊帳へ影の射すまで、朝に晩に目に染みた其の百日紅の在處さへ、何處へ飛んだか、赫と日輪へ附着いて、火花を颯と迸したと見るまでに、——大尉の瞳

はぐらくと成つた。

最う六兵衛の影などは、いつれへ失せたか、全然見えぬ。

此の六兵衛とても、三十分前に、同じ百日紅の樹の下へ、勢よく顯れた時は、胸の惡さに見かへられて、影も形も消えるやうな景氣の無いものではなかつた。

腹巻した、銅造りの胸許露出に、鳩尾の毛を戦がせ、又と突出した片拳に、汚れたりと雖も手拭を引摺んだ、肩を斜めに、腰骨でぐいと極めの、後へ構へて、寝首を掻きさうに、しやつきりと提げた竹の尖に、じつとり重さうな黒髪をするくと捲いて掛けた片端が、ぼたりと仰向けに下つた獲物……尖がつた女の首かと思えつゝ、頭から尾へぬらめきを持つて、仇澤が照々と脈を打ち、蒼黒い蒸氣が、烈い日にむらくと立つて、親仁が竹を握つた手首へ絡んで、胴は繩に纏れながら、草履穿いた足許へ這つた影、畝々と蠢いて、倒に其のぼたりとする黒い鎌首を擡げた腹……

此の長物を、事もなげに提げた處は、天晴れ蛇を斬つて釣鐘から躍出たかの骨柄。

で、及腰に、恠う斜違ひに廻縁の角を切つて、座敷を見込むと、横手と正面、兩方開け擴げた十五疊の、床へ附着いた片隅に、小机を置いて、懶げに肘を懸けて、ト其の肘にハアト形の天窓を載せた、背面向で崩折れたと云ふ風、中形の浴衣の机に折れた袖を洩れて、何か雜誌らしい紙

の端は見えながら、讀むでなく視めるでもなく、うとくとしたらしい容子だつたのは大尉であつた。

腰を些と伸し氣味に、六兵衛、其の形でこれを見ると、頤をかくくと二ツ頷き、

「旦那、旦那々々。」

と勇ましく呼んで、

「六兵衛がす。」

と名乗りかけたは、おのれ、やれ、組んで取られたお主の仇、躍りかゝつて、此の其の恐しい呪詛の繩で縊り殺さう氣構だつたが、呼びかけられて、直ぐにツト向直つた、大尉の、まだ大尉らしい酒ぶとりもしない、髯の細い、口許の優しい、面長な、痩せた頤を見ると、にやくと笑つたもので。

「へ、や、お晝寢でがすかね、えら、お邪魔のうしますだあ、もし、」

と目を細うして、額際の汗を拭く。

「む、何か、」

と痩せた大尉は、背を其のまゝで、肘の手を支きかへた。

「爺でがす、旦那様には、ちよつくら、へい、何でがすかね。」

と口を開けて、又高縁を見越して六兵衛、

二

「へい、何は、奥様はお留守でがすかね。」

と妙にうそく。

「奥さんに用か。」

「いんえ、」

と云つて、又にやりとした。

「まあ、此方へ廻れ。——奥さんは食後に濱へ出掛けたんだ。——」

「へ、へ、へ、そりや、へい、旨え處へ來ましたで。而したら旦那様に好えものを持つて参りましたよ。ちよつくら御免なさりました。」

で、腰を捻つて前へ出す。竹に絡んだ生々しい襷は、百日紅の花の影に、物凄く友染の濡色見せて、日の光に晃々とひだ打ち、鱗が颯と逆立つて、四五枚金色の光を放つた。が、牝の蝮が死装束、臨終の晴を飾つたのであつた。

六兵衛、影の輪を足に絡めて、蝮を地摺に、のそりと件の卵塔場の木戸を入つて、飛石を繞つ

て咲いた松葉牡丹を除けながら、大尉が恣れた机の前面へ、高縁の下なる沓脱の傍へ来て、

「これでがす、旦那、」

と云つたが、無駄だと思つたらう。手柄を正面へは突出さず、竹を横手へ、蝮をずるりと飛石の上へ白く下げた。

「おゝ、あつたか。」

と、大尉は其の読みさしの雑誌へ頬杖つく。

「漸やつと見附けただよ。へい、此の土用中さ、此奴が危険だで、うつかり草の中踏込めねえと云ふだけれども、扱はあ搜すと居ねえもんだ。

聞かつせえまし、これも藪の蔭や澤の縁さ突つき搜して、私が手に引摑めえたもんではねえだね。

此の街道の踏切さ行く處に、別荘があつてね。私其處さ、出入するだが、其の別荘の坊ちやまが、お友達達の書生さんと、たつた今しがたの事だね、これ。お不動様まるとつて、裏田圃から砂濱へ抜けさしつけ。其の畦路の、草の中にでも居ることか、あの岩ぼこの崖路だね、草も生えねえ、早に破れて、ぼろ／＼岩の缺ら降る處に、しやつきり張つて鬼の首さ牙を嚙んで、のたつて居たちうだもの——危え。

潮湯治の嬢さま方、海水着の帶も緊めねえ、跣足ですたゝ通らしやる處だ。出つくはしたら何うしべい。我武者等の坊ちやま達で僥倖だね。――

さあ、見附けたら最後、其の徒、逃しつこはねえ、砂利を溶びせる、石を放る。此奴が、と斂びた手なりに、竹の眞中を流眊に懸けると、蝮の其の敵り方が、口惜しさうにぶるゝとしたやうだつたが、六兵衛の身動きが傳つたので、首は舊のまゝぐたりとして居た。

「何と、此奴が、眞黄色に其の石礫の飛ぶ中を、黒くなつて、ぴんゝ、飛んだり、刎ねたりで、なかゝ以て手におへねえ。

（行つて來う、往かう。）

（畜生、歸途に殺して遣る。）

何處へも行くなつて、其のまんま通り抜けて、坊ちやま達あ御堂へ行きつけ。……可い加減に遊んだりの、お腹が空いたで、晝飯にすたゝ歸つて來さつしやると、何と、へい、舊の處に、然も、へい、のいと菱形の鎌首を擡げて、其もさ、今度アぐるりと此方向きで睨んだ形體。

（わあ。）

（殺せえ。）

と二人とも躍上つて、夢中で、滅茶苦茶に、へい、漸となやしつけた。何が、これ、なやし

了へば三尺足らずの蟲だけれども、容易な事では納まんねえで、炎天に砂煙を上げて働かしつた時は、岩の根さ打つかる浪が黒かつけ、此の長物さ、火繩のやうに赤くなつて芻ねたと言ふだね。

海松の枝、拾つて來て、眞中へぶら提げて、ぎいらぎら、畦道さお別莊の裏木戸へ歸つて來さつしやる處へ、私、晝休みに、又、へい、茶の御馳走に成つて、狸話でもして聞かせますべい思つて、湯殿口からお縁側さ、奥様のへい、海水着干した棹の下潜つて、ひよつこりと出て出會したもんでがす。

其處でへい、」

と又汗を拭いた。

三

「旦那様、此の生肝を薬にせるとツて、見つかり次第に一條提げて來うと頼まれて居たもんだで、(坊ちやまな、爺やに其をくれさつせえ。)

で、堰詰めにして焼酎に浸けるちゆうを、譯さ話して貰つて來ただが。前の内は厭だと言つけ。

露西亞との戦争に、豪ら手柄をなされた旦那様だよ。——年あ少えが、其の手柄に因つて、大尉殿に成りしつた。何せい波の上の修羅場では、夜の目も寝ねえで、辛勞さした、其の疲勞が出て身體悪く成つて、半年にも一年にも夜が寝られねえ、困つた疾病。お友達の軍醫殿、町方の醫師方も匙を投げての、まづ、氣を鎮めて靜に休まつしやるが何よりだちゆうで、此の夏を、村の松輪寺へ御夫婦で來てござります。……

がの、矢張お鹽梅が悪いもんだで、其處で或人が言ふには、蝮の生肝鵝呑みにするだ。すると、へい、心の弱つたには、凡そ此のくれる效力の可えものはねえ、立處に驗が顯れると言ふもんだで、私が頼まれて搜して居ますだ。

然う言ふと、あれだよ。

(さあ持つてけ。)

ツて、さくく投出してくれさしつけ。旦那様の前だがね、坊ちやまも今に海軍にならつしやるちゆうで、お大將へ御奉公だね、旦那様の前だけだよ。

(己たちを待つて、お剩に首を向けかへて居た奴だ、肝は屹と太いぜ。)

お友達が言はつしやる。

そりや可えが、足許へずるりと迂らかして寄越さした長い奴めが、たわいがねえと思ふ、と違

ふだ。何か言ふ内に、脊筋を立てて、のろりと返つて、ぐいと、植込へ首を突込む。

(あれ。)

つて奥様は遁げさつしやる。あわア食つて私、へい、手拭で、其の頭押伏せると、齒向いて、かしり、と噛みついた處へ、坊ちやまが、此の竹さ投出してくれさしたで、ポカ／＼と遣つたでがさ。弱る處を引離いて、へい、踏切線路から大廻りに慫うやつて持つて來たがね。町を突切りや近えだけれども、小兒衆まじりに多えこと女衆が遊びに來て、其處ら歩行いてござるもんだで、又然うでもねえ、青大將とは違ふ。此奴が刎出すめえとも限らねえ、怪我をさしてはなんねえと思つた事でね。へい、それにや生肝さ入用だ言はつしやるけえ、殺切れば仔細ねえだが然うはなんねえ。……えら氣を揉んで持つて來ました、へい。」

先刻から頬杖したまゝ、目を塞いで、半ば、坐睡するやう、時々、うと／＼しながら、可い加減に黙つて頷いて居た大尉は、こゝで、細く目を開けたが、何の其の、二卷捲いた長蟲も、蚯蚓ぐらるとしか視めなかつた。

「あゝ、御苦勞々々。」

と又一つ軽く頷く。

六兵衛、勞はれてほく／＼もので、

「や、何、そねえな事さ何でもねえだが、私、苦勞にしたは、奥様だよ。此の間、晚げえ、旦那様御酒さ飲まつしやりながら、私に、此の註文さつせえた時、奥様は、へい、話だけでも身ぶるひして、

(爺や不可いよ、屹とだよ、持つて來ては厭だよ。)

(馬鹿な、き様。)

と旦那様は言はしつが、へい、こりや奥様は無理いねえね。

けんども、へい、弄物や慰物にさつしやるでねえ。藥だと言ふけえ、私も氣い揉んで、初中眼さあ押はだけて、見えたらござれ、掴めえべいで、漸と一尾手に入れつけ。何うだかな、鹽梅式、奥様居さつしやらねえければ可え工合だが思つてね、へい、お寺の門は潜つても、うつかりと面ア出さねえ。

しばらく鐘撞堂の裏へ踞込んで、本堂から庫裏の方、お座敷は第一、ぎよろりく、晝強盜見たやうに、野天にへい、眼玉ぴかつかせて、はッはッはッ。

何うやら居さつしやらねえやうだから、のっそり出て來ただが、油斷なんねえ。背へ得手物押隠して、旦那様呼ばはつただつけよ。

もの、これが、又見さつせえまし、襪には掛けられず、帯にはならず。……はッはッはッ、帯

にや短し襷に長し、もの唄でがさ。」

「あゝ、唄だよ。」

と大尉はうとく。

四

「旦那様。」

「首か、」

と言つて大尉は愕然として目を開いた。——唐突の此の（首か）に、六兵衛は、あつとも言はず、眼を睜つたなり緊乎と拳を握つて、

「う、へい。」

と言ふ。ト其の顔を凝と瞻めた、瞳が据つて、大尉の顔の筋がびく／＼動く。

六兵衛、食切るやうな口附して、少時して、

「肝、肝でがすが旦那、蝮の生肝を抜いたでがすよ。」と握つた拳をぶる／＼と震はす。大尉は吻と息して、

「あゝ、肝か。」